

# 台湾詩人焦桐の詩における女性の表象

—— 日本と台湾の視点から

● 池上 貞子・徐 照華（原 正人編訳）

## まえがき

台湾の詩人焦桐の作品は、政治性、歴史性、社会性の強い問題を、ユーモア、諧謔、ジョーク、風刺など独特の手法を用いて表現していることで知られ、その作風は台湾の読者ばかりではなく、日本を含むアジアの国々にも影響を与えている。日本での読者は、目下のところ研究者や詩の愛読者が中心だが、近年、日本で行われる台湾現代詩に関するワークショップなどの文学イベントにもたびたび参加しており、日本での認知度も上がりつつある。

日本語訳は、単行本に浅見洋二・北川透・新井豊美・渡辺玄英・横路啓子共訳『黎明の縁』（思潮社、2004年2月）、池上貞子訳『完全強壮レシピ』（思潮社、2007年12月）があり、また林水福・是永駿編『台湾現代詩集』（国書刊行会、2001年10月）に数編が、林水福・是永駿編『台湾現代詩Ⅱ』（国書刊行会、2004年2月）に上田哲二訳『青春標本』が収録されている。

筆者らは2009年度と2010年度に日本と台湾の共同研究による「国際的研究の下での台湾文学／ジェンダー、国家と民族および国際文化の移動」というプロジェクトに参加し、「焦桐の詩における女性の表象」というテーマをふたりで担当した。2009年7月には徐照華が東京の日本大学文理学部で行なわれたワークショップで台湾の視点から発表し、2010年8月には台中の中興大学台湾文学研究所で行われたワークショップで池上貞子が日本の視点から発表した。本論はそれらの発表をもとに調整、構成したものである。なお、Ⅰの徐照華論文はもともとは例証が多く大部なものであるが、本稿が日本での日本語による発表であることも考慮して、要約を採用した。要約は原文の翻訳を担当した原正人氏によるもので、書名や詩のタイトルなど、Ⅱの池上論文とやや訳語の違いがあるが、理解の範囲であるので、あまり調整は行わなかった。

## Ⅰ 焦桐の現代詩における娼妓と軍人描写についての研究 —性的犯罪を主題とする作品を例として

### 1. はじめに

焦桐（本名、葉振富）は1956年、台湾・高雄市生まれ。現在は中央大学中国文学学部で教鞭をとる。中国時報文学賞叙事詩部門優等賞、聯合報文学賞記録文学大賞を獲得。代表的著作として、詩集には『わらび（蕨草）』（1983年）、『咆哮する都市（咆哮都市）』（1988年）、『不眠のうた（失眠曲）』（1993年）、『完全強壮レシピ（完全壯陽食譜）』（1999年）、『青春の標本（青春標本）』（2003年）、散文には『最後の円舞場（最後の圓舞場）』（1993年）、『私は一匹の毛虫に出会った（我邂逅了一條毛毛蟲）』（2003年）、さらに『台湾戦後初期の演劇（台湾戦後初期的戲劇）』、『台湾文学の街頭運動（台湾文学的街頭運動）』、『世界の辺縁で（在世界的辺縁）』などがある。詩作は英語や日本語にも翻訳されている。

焦桐の現代詩は、そのほとんどが巨大な現実、さらには社会問題となる現象を直接的に、あるいは皮肉を込めて示している。『咆哮する都市』は都市生活における周縁化された人物に多くの紙幅を割き、『不眠のうた』や『完全強壮レシピ』では社会、歴史、そして政治へと関心を延伸

させた。しかし一貫して変わらないのは、彼の詩は社会の脈拍を終始深く刻んでおり、人類の苦難を見つめ、常に弱者への同情という筋書きに沿って発展させていることだ。特に女性群像の解析と描写においてそれが顕著である。

焦桐の現代詩における性別描写は、その内容の変化からみて、およそ1995年を分岐点とした前後二つの時期に分けることができる。

前期は「1995年以前」である。焦桐は長編詩「身ごもった阿順の嫁さん(懷孕的阿順仔嫂)」(1983年)で鉱坑災害に遭った貧しい婦人の苦難を描いたほかは、すべて娼妓の苦難、とりわけ雛妓[未成年の娼妓]の悲惨な生涯を題材とした。その後、1990年代初期の「軍中樂園使用規則(軍中樂園守則)」、「鬼分隊長(魔鬼分隊長)」、「七賢路三段を過ぐ(路過七賢路三段)」などは直接女性をテキスト描写の対象とはしていないものの、性犯罪をテーマとしている。

さらに、この時期の描写対象は、弱勢層(女)と強権者(男)という異なる二つの方向に分けられる。後者が描く強権的男性の役は、一般男性から攻撃力の備わった軍人の役あるいは植民者の身分へと変化していった。よって男性による暴力/権力の様相を強め、女性は相対的に弱勢層を形成することを余儀なくされた。

後期は「1995年以後」である。『完全強壯レシピ』では詩の境界の張力を伸ばし、多くのレベルで詩の意味と対象を豊富にした。『青春の標本』で焦桐は再び前衛詩の極限に挑戦し、詩人の生き生きとした多様な美学的作風や言説戦略を展開した。なかでも「国語の試験問題(國文試題)」は明らかに伝統的な性別への執着をひっくり返す悪ふざけや諷刺である。

本論では焦桐の現代詩の性別描写を研究対象とし、その女性群像の形成、そしてその言説戦略の趣旨および美学的特徴を整理する。ただし、本論では焦桐の前期の性別描写のみを対象とする。その時期における作者の描写戦略はどのようなものなのか? 作者の性別意識はどのようなものか? ネットワーク化された社会における性産業における性別の意味は結局いかなるものなのか? 本論はこうした問題に解釈と分析を加えるものとなる。

## 2. 性犯罪 一性搾取と性暴力

### (1) 娼妓

叙事詩「身ごもった阿順の嫁さん」以来、焦桐は周縁化された弱者、とりわけ女性の苦難に対する社会的関心を一貫して持っており、彼の現代詩においては性搾取および性暴力という主題の一連の描写が見られる。こうした作品はすべて散文詩ではあるが、それぞれ異なる方向や視角の叙事的描写がなされているため、性搾取および性暴力下の女性の血涙図を描き出している。

娼妓の存在は、人口比や性欲の差異など多くの要素によるものだが、その大多数は父権社会体制のなかの性別や権力に関するものである。したがって、性交は境界の侵犯、占領や接収、プライバシーの破壊に他ならないのだ。

一方で娼妓は、性産業の一つに属する。性産業は基本的に性の物象化であり、売春は婦女によって性の取引を行うもので、そこでの婦女は完全に自分の主体を喪失し、搾取され圧迫される弱者層となる。

さらに、『不眠のうた』に収められた「彼女の物語」、「小菊」、「小媚」において焦桐が描く娼妓は、そのほとんどが「雛妓」といわれる未成年の少女で、弱者層中の弱者層である。こうした詩が示すように、女性が妓女へと落ちぶれる原因はみな男性がもたらしたのであり、彼女たちの悲劇的な運命はすべて自らの父権の圧迫によるものなのである。現代社会においても、労働市場をコントロールするのは大半が男性の資本家や管理階級であり、コントロールされるのは女性労

働者たちである。

このように、女性は比較的地位が低いいため、彼女たちの労働力の大部分は非正式な経済環境に限られており、加えて種々の環境に圧迫されるなかで売春やその他の性的労働を選ばされるのである。焦桐の「小菊」、「小媚」、「彼女の物語」における女性主人公はみなそうした存在であるといえよう。

このような弱者層の性産業従事者は、客の蹂躪、さらには性的変態者による屈辱に耐えねばならないばかりか、用心棒による陵辱や懲罰にも何度となく遭わねばならない。焦桐は「小菊」などの詩のなかで、性暴力や性虐待といった雛妓に対する非人道的な扱いについて念入りに描いている。焦桐は小菊のエスニシティ〔原語は「族群」〕の記憶と原住民の文化的コンテクストを結合させ、現在と過去が交錯し、常に変化する夢の世界を詳しく描く。そこでの「精液」は侵犯・攻撃・占有という特質を強く持っており、「男性の威勢」あるいは「男性の本性」の象徴とみなしうる。このときの女性は、完全に占有されており、もはや独立した個体ではなく、完全に自己を喪失している。

さらに、「小媚」では、性的変態者の虐待が描かれている。この女性の身体言語に関する描写が明らかにしているのは、権力／性別の関係、父権体制下での男性権力の支配や弾圧に他ならない。これは、男性が女性を物象化していること、そして女性の身に加えられている性的虐待および性暴力を示しており、社会の男女の持つ権力がどれだけ不平等であるのかを反映している。

同じことが、娼妓にも言える。娼妓のいる妓院や娼館、あるいは私娼の寮などの空間に対する焦桐の描写には、束縛され、搾取される寂寥感が満ち溢れている。焦桐は明らかにこうした束縛的な表現を用いて、父権体制が女性に加える種々の鎖を示している。束縛され、鎖をかけられ、搾取されるのは、家族の情愛、愛情、故郷への感情、および人として享受すべき自由で広々とした空間と思いのままになる権力なのである。

娼妓たちにとって最大の悲劇は、社会において意のままになる権力を全く失っていることだ。女性の最もプライベートな部分が完全に犯され、陵辱されているほか、各種の異常性癖者による刑罰や虐待をしょっちゅう受ける。幾度も多種にわたる苦難と心身の苦痛によって、若い娼妓は尊厳などなく、破滅的な存在なのである。

こうした女性が従事する性産業の背景には巨大な経営ネットワークがあるが、こうした経営ネットワーク自体が、女性が物象化される傾向を如実に示している。焦桐は「銭夫人」という詩のなかで、これについてかなりまとまった描写をしている。すなわち、商品たる女性たちを各種のエロ・メディアに登場させることで、男性たちの性的欲望の分泌をうまく促し、それによって自分が経営する性産業の市場をさらに安定させ、規模も日ごとに拡大させるさまが描かれている。ここで焦桐は「性産業の市場」、「輸入」、「取次ぎ販売」、「販売」などの商業用語を多く使い、台湾の女性が貨物や商品の符号のようにみられていることをあざけりあてこするという効果を起こそうとしているのである。

## (2) 遊客：軍人と植民者

娼妓の売春は男性ヘゲモニー文化体制における弱者層に対する強権の性別支配に他ならないのだが、このメカニズムはどのようにして長い間にわたって存在できるのだろうか。それは絶えず性的サービスを買う客がいるからだ。女性に対して性搾取を行う強権者としての男性については、焦桐はその〔男性と女性の〕間の強／弱の張力を深めるために、攻撃力や侵略力を備えた身分として男性を出現させている。

「軍中楽園使用規則」はかなり前衛的でポスト・モダン的な詩である。焦桐は詩のなかで、9条の規則という形式をとり、冷やかで厳しい言葉を用い、なおかつ暗喩を多用している。たとえば、「将校が使用し」、「下士官と兵士が使用する」など、「使用」という言葉によって、男性たち（軍人）が軍中の娼妓を物品として扱っていることを隠喩している。さらにこの詩で嘲り皮肉っているのは、政府が売春のメカニズムを公表していること、女性への性搾取によってもたらされる別の「労働力市場」を政府や軍が公にしていることである。その背後には、父権文化体制全体における男性と女性の不平等、そして「性」をめぐる男女間のダブル・スタンダード、要するに根深い性別イデオロギーが厳然と存在しているのである。

続いて、もう一つの方向として、焦桐が軍人男性をどう描写しているか分析する。「鬼分隊長」に描かれているのは、戦場で勇敢によく戦い、輝かしい戦功を上げ、人が敬って「鬼分隊長」と呼ぶ日本陸軍の下級兵士、山口宰太郎である。

焦桐は、男性の生殖器の権力的支配と多数の精子による攻勢を、男性の本性および風貌の象徴とし、それによって、鬼分隊長が狼男のように残酷、狡猾、そして邪悪な性的侵犯を行っていることを隠喩している。さらに、鬼分隊長は戦場で生死を賭けた挑戦を受け、さらに軍隊の体制下で絶対服従の圧力も受けているがゆえに、自分の権力意識を守るために、異常な恐ろしい強姦行為を犯した、と焦桐の描写から読み取ることができる。

そのうえ、「鬼分隊長」では、性別／権力の問題のほかにも、それ以上に植民者の被植民者に対する侵略を隠喩している。邱貴芬は「コロニアルな言説は常に性別の区分を骨格としており、〈中略〉男性であれ女性であれ、植民される側が女性化される」と指摘している。「鬼分隊長」において、植民者としての鬼分隊長は、被植民者である土地や女性に対して搾取、凶暴な行為、蹂躪を同時に行っている。植民国家の軍人が被植民国家に対して取奪をはたらくのは、彼が被植民国家の婦女を強姦し、凶暴な行為を行うのと全く同じである。焦桐はここで、男性の父権体制の権力の中心を強烈に批判しているのである。

### 3. 性搾取、反父権、および植民への抵抗

性搾取は、西洋のヘゲモニーが発展途上国を制御する道具でもある。たとえば、発展途上国に駐留する米軍は、性的商品や売春を欲求することで、当地の女性に対して搾取を働いている。ベトナム戦争時期、台湾の花蓮や高雄などの地はしばしば米軍のレジャーの場となったため、台湾人女性が西洋ヘゲモニーとしての米軍による性搾取や性暴力の主要な対象となったのも理解しうる。焦桐は「七賢三路を過ぐ」のなかで、この題材に対して意味深長な表現をしている。

ベトナム戦争時期、台湾はアメリカの経済・軍事的植民を受けており、基本的に台湾はすでにアメリカの半植民地であった。詩のなかで植民者たる米軍は、侵略性や攻撃性に満ち溢れた軍隊の強権的イメージを持つだけでなく、同時に男性の役割と気概という権力的象徴を練り上げてもいる。たとえば、「上陸」、「占領」などの句は、表面的には軍隊が土地を占領するという堂々たる風貌を指すが、同時に女性の身体に対する男性の侵犯や支配をパロディ化している。また、軍需品とは米軍による台湾人女性への性搾取を直接示している。なぜなら、米軍に対して台湾の土地および台湾人は「買われる女性」の役割を演じているからである。したがって、荒唐無稽、皮肉にあふれたこの詩には、強烈な文化的な衝突や民族的自尊の屈辱ゆえに呆然とするうら寂しさが漂っているのである。

#### 4. 結論

父権体制の女性に対する最大の迫害は、女性の身体を物象化し、彼女らの人としての主体と尊厳を奪ってしまうことだ。「娼妓」のメカニズム以上に女性の身体を徹底的に物象化するものはない。焦桐の一連の娼妓の描写には、性別の身体言語、空間言語などによって、娼妓の女性としての苦難や悲惨さが表現されていた。

一方焦桐は、遊客のなかで最も侵略的、暴力的、攻撃的な存在のモデルとして軍人、とりわけ植民統治者の軍人を挙げた。これら二者への描写によって、男性による暴力／権力のイメージが強化し、女性は相対的に弱者層として形成されることをより深く印象づけた。これこそが焦桐による描写の戦略なのである。

焦桐の娼妓における一連の性別描写は、それぞれ二つの重要な意義があった。一つめは、伝統的な娼妓の映像に依拠して、その背後の父権社会における性別意識を示したことである。二つめは、ポスト・コロニアル言説からみて、こうした一連の娼妓の描写によって、台湾が歴史上たびたび蹂躪に遭ってきたといういわば被植民モデルを隠喩したことだ。それはオランダ、スペイン統治時期から明清時代、日本統治時代、さらには国民党時期、およびアメリカの文化的・経済的植民などを含むあらゆる被植民の経験を、娼妓の苦難によって暗喩しているのである。

## II 焦桐の詩における女性の表象——「ジャスミン遺事（茉莉花遺事）」を解読する

### 1 はじめに

筆者池上貞子はかつて焦桐の詩集『完全強壮レシピ』を翻訳したとき、その世界が「性・食べ物・植物・思想・政治などが交錯し、もつれあう」世界だと述べ、それが彼の一連の定型文への挑戦、言葉を変えて言えば、転覆・破壊行為の線上にあること、しかしその一方で、あたかもそれらとバランスをとるかのよう、女性一般、あるいは血族に対するかなりの思い入れを表出した詩も多いことを述べた<sup>1</sup>。先の徐照華教授の論文「焦桐の現代詩における娼妓と軍人描写についての研究——性的犯罪を主題とする作品を例として」は、そのことを男性性の最たる表出である軍隊やその他、性にかかわる場面で表象された事例を取り扱ったものと言えるだろう。本論では、彼の創作、とりわけ詩のなかにおける女性の表象をこれとは別の切り口から取り上げて、彼の詩の世界の特質を考えてみたい。

ところで、筆者は焦桐の詩に接し始めた時、「ジャスミン遺事」という一編に強く惹かれた。これは、筆者自身が以前母方の祖母（外婆）への想いを短い詩に書いたことがあって、無意識のうちに共感していたのかも知れないが、その後、焦桐の人生や創作活動に対する理解が深まるにつれて、この詩にはまさに先に述べた社会的な面や男性性を強調するケース＝詩集『失眠曲』、『咆哮する都市』、『完全強壮レシピ』などとは別の方向を示しながら、それらを補って、彼の文学世界全体を構成する重要な要素をいくつも含んでいるのではないかと考えるようになった。

筆者は、彼の詩作全体のキーワードは「生命」であると考えている。そこから出発している彼の詩が、表側で政治や社会の問題に挑戦する一方で、内に抱えているものは何か。本論ではもっぱら「ジャスミン遺事」を中心に取り上げ、この詩から見える焦桐の詩世界をひもといてみたい。

### 2 「ジャスミン遺事」：女性／骨肉

解読の都合上、本作品について、まず全編を紹介しておく。

祖母はいつも肩に水桶をかつぎ

髪には満開のジャスミンの花をかざっていた  
後ろからでも笑顔が見えた  
どうやら薄靄に包まれた明け方らしい  
幼い僕は花の香りのあとをつけた  
花の香りも祖母のあとから野菜畑へ

僕はよく恋しさに耕作する  
画面のなかの壊れた野菜畑  
祖母の植えたジャスミンの花に  
歳月に浸食されていくつもの穴ができた  
あの頃の花の香は道に迷い  
ずいぶんかかってやっと僕の中年の夢境に入ってきた

この作品は1990年に書かれた。その後至近の1993年に出版された第3詩集『失眠曲』には収録されておらず、2000年5月に爾雅出版から出版されたアンソロジー『世紀詩選 焦桐』の中では「未収録作品」として収録され、その後2003年8月に出版された第5詩集『青春の標本』に収められた。ちなみに第4詩集は『完全強壮レシピ』1999年である。『失眠曲』や『完全強壮レシピ』の作品世界には馴染まないが、焦桐の詩の世界全体という観点からすれば、欠くことのできない作品だと考えられているということなのであろう。

初期の代表作「身重の阿順仔ねえさん」1980年はまさに女性のことを歌った詩だ。当時、実際に起こった事件<sup>2</sup>を題材に、まだ大学生だった彼は、社会的な事件を女性の立場に立って描いた。創作の背景を自身、こう説明している。

1980年春、私は新聞で永安鉱山の事故災害の記事を読んだ。この事件のため私は長い間辛い思いを抱え、昊天（こうてん）傭（ひと）しからず、此の鞠詢（きょくきょう）を降す（『詩経・小雅』の中の言葉。「天は不公平だ」の意）というわけで、その季節の間ずっと、軽い憂鬱にとらわれていた。そのため理論と実践の間に激しい衝突が生まれた。人生悲喜こもごもに対し、私はとつぜん歳月の逼迫と、生命の巨大な溜息とどうしようもなさを感じた。その当時、私は文章で自分の考えや意見を表現してみようと試し始めたばかりだったのに、すぐにその無力さを思い知らされた。一度などは、傷心のあまり、「詩というのはおそらく無用の長物にすぎないのだ」とまで思った<sup>3</sup>。

この作品の特徴は、大きな社会事件を扱っているのだが、これを正面から社会問題として声高に議論することはせず、犠牲になった一炭鉱労働者阿順仔の身重の妻の独白という形で表現していることである。彼女はその朝も、ごく普通の炭鉱労働者の若妻としていつものように夫を送り出すと、家の裏の小川に行き、洗濯をしながら、夫のことを考えていた。「あんたたちは坑道の入口で／三三五五天秤棒を担ぎ、煙草を吸って、入坑の采配を待っている／／あんたたちは静かにトロッコに乗って、潜っていく／地の底の闇に向かって進む／阿順仔、あんたはすぐにも、すぐにも裸で入ろうとしている／息苦しい空気の中へ／仕事は、一歩ずつ一寸ずつ／一寸分をつるはしで叩き、一寸分を鑿で掘る<sup>4</sup>」

まるで話劇の独白のようだ。繰り返される言葉は、やがて起こる悲劇の大きさをいやが上にも高める効果がある。彼女は夫が帰ったら、夕食の席で「子どもが生まれるのよ」と告げようと胸躍らせ、子どもには「学問や勉強」をさせてもっと安定した生活をさせようと、さらに妄想を膨らませていく。が、やがて炭鉱で事故が起こったという知らせが届き、彼女は奈落の底に突き落とされる。

これらすべてが主人公の独白によって表現されていることにより、読者には彼女の心のうちが手に取るようにわかる。つまり彼女の心の動きに寄り添うことにより、自分の心身の外で起こっている社会的大事件を、ちっぽけな心身の内部に引き受けざるをえない人間の運命の過酷さ、痛みを、読者ひとりひとりに我がことのように感じさせる。こうした登場人物の「独白」という手法は、彼が大学で演劇を専攻したこととも関係があるだろうが、その視点、すなわち語り手を一労働者の身重の若妻に設定したことは、自ずと作者の立つ位置を示している。彼は、同じころ、「彼女の一生（她的一生）」という詩も書いている。話はこうだ。ある女の子の、唯一の骨肉である兄が水夫として異国に行ったまま行方不明になった。13年後、彼女は苦界に身を沈めていた。ある晩迎えた客は、なんとその実の兄であった。彼女は運命のいたずらに耐えきれず、自殺する。この短い散文詩は、焦桐が早くから悲惨な運命の女性への目配りを行なっていたことを示している。

こうした庶民の女性への思いやりはどこからくるのだろうか？ やはり焦桐自身の生い立ちと深くかかわっているにちがいない。自らの生い立ちについて彼はこう述べている。

私は中華路段の愛河に臨む貧しい家で生まれた。生後間もなく、父親に捨てられたため、母は他所に働きに出、私は母方の祖母もくまおばの家に預けられた。幼い時から非常に孤独で性格もひねくれ、しばしばひとりで河べりの木麻黄もくまおばの木の下に座って母を想った。祖父の田畑、豚小屋、祖母の野菜畑やそこで飼っていたニワトリ、アヒル、ガチョウなどの光景は今でもありありと目に浮かぶ。祖父母が植えていた龍眼、グアバ、パナナ、葡萄は、私の記憶のなかで絶えず繁茂し続けている<sup>5</sup>。

つまり彼の幼児期には父親の姿はなく、母親や外婆などの女性の影響が大きいということだ。苦勞して自分を育ててくれた母親への想いは、エッセイ「バイク（摩托車）」（後述する『わが“房事”（我的房事）』所収）や詩「五〇四号病室（五〇四病房）」にあふれている。前者では、大学生3年生の時、アルバイトの必要のために、母親は虎の子の貯金をはたいてくれた（なのに、結局は人に騙されて、使えない中古品を掴まされていたという社会的義憤も含む）。後者は、交通事故に遭い、生死の境をさまよう母親のために、祈るような詩人の母への強い愛情が盛り込まれている。

しかし、折節に自分の原点としての幼児期を回想する時、心に浮かぶ骨肉は、外に働きに出ている母の姿ではなく、むしろ母方の祖母の姿だにちがいない。祖母は幼い詩人を守ってくれる存在であるとともに、守ってくれる男性もなく社会で奮闘する実の娘すなわち焦桐の母親の味方であって、幼い詩人にとっては無条件に頼れる、肯定すべき存在であったはずだ。

焦桐は「ジャスミン遺事」のほかにも文字通り「祖母（外婆）」2001年という詩の中で、幼い自分と祖母との、さらに具体的な日常生活の断片を切り取ってみせている。ここでも、「……僕がジャスミンの花の香りを嗅いで／夢の境界に沿って漂い行くと／田畑や草木が深呼吸した」。だが、最後には、「祖母が手を振っている姿が見える／何度も何度も僕に手を振る／バイクが消

えた／道路が消えた／田んぼが消えた／野菜畑が消えた／振り返ると／僕自身が消えているのに気がついた」。

焦桐自身、1987年に娘が生まれると、しばしばそのことに言及するとともに、骨肉にかかわる創作や活動が増えてくる。具体的な作品については、次の2や3に譲るが、子育ての中で自分の幼児期のことと重ねたり、比較したりすることが多くなる。祖母や母親の苦労や気持ちが分かってきたと同時に、受け継がれていく生命というものを強く感じたのではないだろうか。「ジャスミン遺事」1990年はそのような時に書かれた。女性とりわけ「骨肉」系列の代表的な作品と考えてよいだろう。2003年に編集出版した『軒下の風景（屋簷下の風景）』『母の花畑（母親的花圃）』は、編集者として序文を書いたのみで自らの作品は含んでいないが、余光中や席慕蓉など著名人の「骨肉」に関するエッセイ集である。その中で林懷民の母の無尽の愛を綴った「母の花畑」、父や祖母への愛を綴った席慕蓉の「父が私に教えてくれた歌（父親教我的歌）」、農夫の父親との共生感覚を綴った蕭蕭の「夜はいつ明けるのか（什麼時候天才亮呢）」など、焦桐自身が書いたとしてもおかしくないような骨肉への感情の吐露であふれている。

先ほど引用した生い立ちや身内の人間にかかわる文章は、2008年に出版したエッセイ集『わが“房事”』に収録されている。このエッセイ集を編集した事情について、本人はこう述べている。

最近、書物の原稿を整理していて、この何年かの創作および研究が、多くは飲食に集中していたことに気がついたが、これらは次々出版を予定している。このほかに、分類のしようのない文章で、以前書いたものに内容が近いのがあったので、編集出版しようと考えているに至った。本書の巻一におさめられているのは、『最後の円舞場』の内容で、巻二に納められたのは大体『僕は一匹の毛虫に出会った』のものだ。この2冊は何年も前に絶版になっているので、何篇か削って新しい文章を加え、『わが“房事”』として、再出版の決意を示した<sup>6</sup>。

すなわち、これも「ジャスミン遺事」の詩集収録の経緯について述べた時と同じパターンで、何か外向けのテーマや意図がある場合には傍らに置いておかれるが、焦桐の創作全体としては欠くことのできない要素なのである。多忙な中で、〈道に迷い〉そうになった時、振り返り立ち戻って再出発できる場所がここにあるというわけだ。

### 3 植物／生命

焦桐の第一詩集のタイトルは『わらび』であり、収録された表題作の詩では、まだらに剥げた堀のすみに苦しげに芽を出した、いかにも素朴なわらびに強い生命力を感じ、最後には「鮮やかな緑がわらびを際立たせ、上昇して／ひとつの信念を追求する／広大な闇のなか 黎明の緑に／遠くかすかに見えた気がする／陽光あふれる草原／草原の呼び声」と歌う。これは以下に紹介する「身重の阿順仔ねえさん」に共通の語彙、繰り返しの表現などが見られ、高揚した初期作品に共通しているのかも知れない。それはともかく彼が植物に深い関心をもっていることは早くから表明されていたことで、幼児期に農村にある祖母の家で生活していたこと、すなわち先に引用した祖父の家の周りのことや大学時代の陽明山での生活に触発されたことはエッセイなどでも触れている。

1で取り上げた女性たちにも、それぞれ花が添えられているのは興味深い。先に述べたように、生命を育みつつある「身重の阿順仔ねえさん」には野生の生姜の花が添えられている。これは、先に引用した、阿順仔ねえさんが働く夫を想いながら洗濯をする場面に続く段落だ。



……

まだ朝早く、  
深澳坑のいつもと変わらない早い朝、  
陽の光がまぶしい、陽の光が  
水辺のススキの群れ一つ一つにあたる；  
あんたは地の底にいる、  
あんたの陽の光は  
ヘッドライト。

2

陽の光が  
草むらの外にあたる、ひともとの野生姜の花が  
静かに咲いている  
あたしは水辺で洗濯、隣の  
ご老体清水おじさんの姿が見える、

これは悲劇の起こる朝の光景で、ススキの茂みとその外に楚々として咲く野生の生姜の花は対照的だ。

そして、「五〇四号病室」の母の、交通事故で入院している枕もとには可憐な秋海棠がある。

僕は母さんの白髪混じり髪を洗ってやり、  
病床でつきそっているとますます家が恋しくなる、  
母さんの様子はまるで風雪に耐えた海棠の花。

(愛する母さん：

冬の寒風が春の知らせを運びます、  
あなたの植えた花に僕は毎朝水やりをしています、  
いくつかは待っているうちに熟睡して、  
あなたの帰りを待ち焦がれています)

僕はその赤い花、緑の葉、そしてそこにあたる光を大事に思う、  
陽の光、ああ、永遠なる陽の光よ、  
明るい希望を照らし出しておくれ、  
そして僕に代わって母を守り、  
いつか山東街から熱河街を通り  
漢口街を曲がって家に帰らせておくれ、玄関のそばには  
楚々とした秋海棠を置いておく、  
その香りが額にやどる悲しみを慰めてくれるように。

これらは大学時代の体験に基づくだろう。こう書いている。「大学の4年間、私は新園街のそばの辺鄙な谷に下宿していた。谷に入るためには、まず苔の生えた石段を下り、生姜の花とゴミの山の谷川を通り、さらにもう一度石段を上らなければならなかった。石段の両側には、野生

のチョウセンアサガオや蛇いちご、台風草、フキ、車前草（オオバコ）など数十種類の平凡な植物が自生していた。そして家の中の壁の隙間には四季咲きの秋海棠が咲き乱れていたのである。（後略）」<sup>7</sup>

そして白い色、濃厚な香り、この花を髪や胸に飾る台湾の伝統的な習慣…ジャスミンの花は、「ジャスミン遺事」や「祖母」において、すでに祖母の記号となっている。前者は冒頭で紹介したとおり。「祖母」には以下のくだりがある。

-----  
僕の祖母は雨靴をはき  
顔は収穫後の野菜畑みたいだった  
ふと僕の声の手が祖母の背中を押したとき  
僕はジャスミンの花の匂いを嗅いだ  
夢の境界に沿って漂ったので  
田畑や草木が深呼吸した

こうした花々には彼の女性への敬意や思いやりが感じられ、ロマンティズムを感じる。花を添えると言えばややこそばゆい感じがするかも知れないが、植物ということで考えれば、これも生命のひとつの形であり、焦桐の関心を寄せるところである。彼の登山（自然の中歩き）はよく知られていることである<sup>8</sup>し、動植物への細やかな関心とそれらに関する知識は確かなものがある。

それらの知識がトータルに披瀝されているのは、1992年に台湾省政府教育庁児童読物出版社から出版された「中華児童叢書 国立公園紀行③」の『カラスアゲハ阿青の旅（烏鴉鳳蝶阿青の旅程）』だ。この主人公は「大屯山と二子山という火山の間にある谷」で「吸いきれないほどの花蜜植物」に囲まれて成長したカラスアゲハの阿青で、阿青はフォークダンスのお祭りに参加して、他の種類の蝶や蛇、鳥など、おおぜいの動物と友だちになる。「阿青は祭りでおおぜいの他所の土地から来た友だちと知り合いになった——竹子山のタイワンオオタカの阿力、磺嘴山のセンザンコウの阿土、大屯山のカラスアゲハの阿翔、七星山のクロヒヨドリ……これらの友だちが別れの時に、旅行においてよと熱心に誘ってくれた」。これらの場所への旅行は阿青のような小さな生き物にとってとても大変なことではあるが、阿青は果敢にも出かけて行って、阿力のところの「森の音楽会」、阿翔のところの「火山劇場」に出席し、さらに七星山のクロヒヨドリのところでは、「溪流競争」にも参加する。

これらを通じて、動植物それぞれの生態およびそれぞれについての知識を深めると同時に、雲の動きや霧などの自然現象の仕組みを理解し、地形とその成り立ちに対する理解を深めたりした。また、その間、遠く1967年にはすでに、旅行好きの浙江人——郁永河が海を越えて北投にやってきて、台湾史上有名な硫黄の採掘精錬を行ったこととか、1920年代には日本人が蓬莱米という品種の米を試験的に栽培したとか、70年代に日本人が珍しい蝶を高値で買い取ったために混乱が起こった話など、歴史的な逸話もちりばめられていて、空間のみならず時間的な視点も加えられている。

余談であるが、温泉地帯で、阿青がきれいな黄色い硫黄の結晶をよく観察しようとして、噴気孔に近づいたとき、ふいに「珊珊、ぜったいに硫黄の噴気孔に手を入れてはだめだよ。やけどをするからね！」という声がしたので、あわててその場を離れるというシーンがある。この名の娘

をもつ眼鏡をかけた男性というのは、焦桐本人の自画像にほかならず、ここに作者のユーモアと遊び心が感じられる。いずれにせよ、こうした内容の絵本は、陽明山の地形や動植物の生態に精通していた彼ならばこそ可能な営為であろう。男性の彼は、直接生命を育み伝えるということとはできないが、生命にまつわる知的な営為は可能であり、喜んで参画するということかもしれない。

自然への関心は自然環境問題への関心につながり、しばしばエッセイなどで問題点を指摘している。『わが“房事”』の最後の数編「そのキラキラ輝く高貴なクリスタルグラス（那只晶瑩高貴の玻璃杯）」「風の谷のナウシカ（風之谷）」「悪夢」「五指山の涙」はみなごみ処理の問題、環境破壊の問題がテーマだ。また、動植物への関心は、生命の維持という観点から食物や医療へつながり、その成果は『完全強壮レシピ』やその出版後の食に関する出版や諸活動と発展しているわけだが、よく知られていることであるし、本論はむしろその周辺を埋めるのが目的であるので、ここでは多くを述べない。動植物や自然の景観への関心が、環境破壊やごみ処理問題へと発展していったように、人間の生命への関心は、エッセイ集『世界の周縁で』（九歌出版社、1995年）に端的に示されている。これは彼がNPO団体「世界展望会」が毎年行うイベントである「飢餓三十」のメンバーの張艾嘉等とともにアフリカの暗部ザイール（現・コンゴ民主共和国）に入り込んだ時の4日間の観察と思索を、経験を興奮さめやらぬ時に綴ったメモを基にした長文のエッセイで、彼は「いつまでも巴夏拉難民キャンプの子どもたちのことが忘れられない。彼らの腹はふくらみ、痩せさらばえ、皮膚は布のように破けている。彼らのか細い声がずっと耳にくっついていてみたいだ<sup>9</sup>」と書いている。

#### 4 道に迷う／帰還

話を「ジャスミン遺事」に戻すと、描かれているのは祖母の姿であるが、詩自体からすれば、記憶の中でその後姿を追っている作者の想念がいわゆる伝えたいこと、すなわちテーマだということになる。その意味で、詩の最後のフレーズ「あの頃の花の香は道に迷いずいぶんかかってやっと僕の中年の夢境に入ってきた」はよく吟味する必要がある。この一文の主語「あの頃の花の香」は幼児期の記憶やそれぞれの骨肉への懐かしさと複雑な思いを表わすと同時に、それまでそれらを封じ込めて奮闘してきた若い自分の姿に気づき、それを解き放とうという意志さえ含むのではないだろうか。「道に迷う」という言葉は後には一編の詩のタイトルにさえているが、「私」を主語として時々使われる。このことは、自分は今どこにいるのかという不安から出発し、自分は何者なのかという問いかけや不安感、確認の姿勢などにもつながっていくだろう。

1987年6月、31歳の焦桐ははじめて父親になった。その年の7月には、台湾で38年間続いた戒厳令が解除になっている。彼にとって、公私ともに新しい価値観による新しい出発の年になったのではないだろうか。この時期、娘について語るとともに、それに重ねるように、自らの幼児期の記憶に光を当てる作業が行われている。1988年の作「アルバム（照相簿）」には主語がなく、アルバムに貼られた写真（の記憶）が薄れていく（あるいはそれらと決別する）ことが歌われており、個人と言うより戒厳令解除後の、台湾人一般としての運命を描いているようにも思われる。価値観の急な転換は、個人としてはかなり喪失感を伴うものであったろう。筆者は同じく台湾の作家朱天文の『荒人手記』を翻訳する際、そのことを強く感じた。焦桐も、「未来への回帰（回到未来）」1988で、「これは僕の青春の標本か／それとも浮遊する歳月の塵芥か」と問いつつ、最後には「ああおそらく過去は記録が可能なだけで／塗り替えることはできないかもしれない／僕は深い愛の追憶を抱いて／未来へ回帰するほかないのだ」と歌っている。過去には戻れないのだから、過去の種種を抱えて前へ向かおうというスタンスだ。

これらに対し、同年の「出生証明」は満一歳になった娘を見ているうちに、自らの幼き日を思い出し、比べるというもので、骨肉への思いが重なっている。同じく同年の「童年」では、孤独な自分の姿が描かれる。その少年はガジュマルの樹の傍で、連れもなく、ひとりブランコに乗っている。ここで直視され客体化された孤独な少年は、1990年の「ブランコをこぐ（蕩鞦韆）」で再び登場したときには、父親の姿で現れ、ブランコに乗り声をあげて笑う娘の姿にまたもや幼い日の孤独な自分を思い出す。ブランコの揺れを想起させる不揃いの長さの句子や時々揺れ戻ってくる同じ言葉がリズムを作り、その同じ言葉「娘の笑い声」とは物思いにふける父親＝詩人の内面が対照を成す。「僕は自分を支えて／上がったり下がったり／生活の中でブランコをこいでいる／上がっては沈み／快樂と憂いの間で／戦々恐々と／揺れるのはみんな過去の風景／束の間に消え去るのはいつでも未来への憧れ」。最後のこの屈託について、今回は深く検討する余裕がなかったが、1997年の「道に迷う（迷路）」でも、あいかわらず「ひとりで帰宅する時また方向を見失った」（一行目）、「僕はほんとうに帰路につきたかったのだろうか／それとも出口を見つけて早く戻ろうと焦っていたのだろうか／僕たちが別れたあの場所に戻ろうと」（末尾）と迷い続けている。「遠足」1998という詩は、「ブランコをこぐ」と同じように、子どもの頃の遠足の思い出を描くようでありながら、すべてが離れ去っていき、やがて、「僕はわざと道に迷った／水筒とチョコレートキャンディを持って／自分から離れ去り／世界の果てまで行ってから／振り返るともう友の姿は見えない」と歌い、自らが独自の歩みを始めたことを伺わせる。焦桐の詩を、筆者の言う外側（社会）に向かうベクトルで解読する唐捐は、以下のように述べる。「詩人は『僕はわざと道に迷った』と決然と宣言することによって、世の中の既定となっている方向を変えようとした。耳で聞くと、8つの「離れ去る」という言葉には喜びの口吻さえ感じられる。このような常軌の逸脱やおきて破りへの願望は、重大な予告なのだと言えるかもしれない」<sup>10</sup>。

この予告が暗示するものが、1999年に焦桐が出版し、話題になった『完全強壮レシピ』だということになるだろう。同じ年に書いた「台湾同胞証明書（台胞証）」は、大陸との齟齬あるいは微妙な違和感を歌っている。この詩は、国民党渡台50周年を念頭に置いた公的なアイデンティティの表現であり、『完全強壮レシピ』の作品世界に散りばめられていた諸々の要素の凝縮だと思う。『完全強壮レシピ』以後の彼は、2001年夏に中央大学の専任教員になると同時に、二魚文化出版公司を創設し、詩を含む執筆活動や旅行も精力的に続けている。2003年には先に述べた骨肉に関する2冊のエッセイ集『軒下の風景』『母の花畑』の編集出版を行ない、それまでの詩集に漏れていた作品や1990年代後半以降の詩を収録した第5詩集『青春の標本』を出版し、2008年には先ほど紹介したように、「『わが“房事”』として、再出発の決意を示した」。こうして見てくると、彼は迷いと回帰をくりかえすが、総体としては剛と柔、内と外…などうまくバランス取りつつ歩んでいるように思われる。

「ジャスミン遺事」には、焦桐のもつ、こうした諸々の要素が、凝縮されていると考える。

## 5 おわりに

焦桐が創作を開始した1970年の終わりから80年代にかけては、国際社会での地位の変化などもあって台湾社会が揺れ動き、個々の人たちにとって価値観の激変を迫られるものであった。詩人はその中で既成の価値観に挑戦し、「麻痺の打破」を図ってきたと評価される。生い立ちの中で身近に「闘う強い父」の見本がなく、ナイーブな内面をもつ焦桐は、無理をせざるをえなかった部分もあろうし、こうした圧力の大きい営為に対し、しかるべき拠り所か、そのような外に向かう強い力とバランスを保つための内的な何かを必要としていたであろうことは想像に難くない。

それらが先に述べた迷い／回帰の心情の吐露であり、また骨肉に対する思い入れだったとも言える。長くはない「ジャスミン遺事」という1篇の詩は、そうした「癒し」の詩とも言えるのかも知れない。

## あとがき

本論では、同じく焦桐の詩における女性の表象をテーマとしながら、Ⅰでは焦桐の外に向かうベクトル、すなわち社会的視点に重点を置き、Ⅱは内面の問題を扱った。Ⅰでは台湾のもつ歴史的な事情と言語とのかかわりが詳細に考察されており、こうした論述が日本で発表される意義は大きいと思う。Ⅰの外から詩人に向かう道筋と、Ⅱのミクロ的に一作品に焦点をあてて詩人の中から外へ広がっていく思念をたどる道筋がどこかで交叉して、台湾の詩人焦桐の全体像をうまく伝えられることができるなら幸いである。

- 1 池上貞子訳『完全強壮レシピ』（「訳者あとがき」）東京・思潮社、2007
- 2 詩には以下のような前書きがついている。「1980年3月21日午前11時40分、台北県瑞法芳の永安炭坑順興分坑で災害が発生した。入口から380メートル、右斜坑右の3本の坑道で、坑道が崩れて大量の水（キールン河から来たもの）が入りこんだ。事故発生後、脱出できたのは11名だけで、その他の34名の炭坑夫は地下600メートルへ落下し、避難できなかった。」
- 3 「起点—— 詩集『巖』あとがき』『咆哮都市』漢光文化事業、1988所収、127頁
- 4 「身重の阿順仔ねえさん」同上103-104頁
- 5 「わが愛河（我的愛河）」焦桐『我的房事』二魚文化事業、2008所収、11頁
- 6 焦桐『わが“房事”』（「序」）二魚文化事業、2008、10頁
- 7 「温泉地帯」同上書、211頁
- 8 唐捐「麻痺に立ち向かう（向麻木開火）」では、本論で言う外的な部分を取り上げて論じており、登山を「通俗への抵抗」の象徴ととらえている。『世紀詩選 焦桐』、爾雅出版社、2000、12頁
- 9 焦桐『世界の周縁で』「あとがき」九歌出版社、1995年、170頁
- 10 唐捐「麻痺に立ち向かう」『世紀詩選 焦桐』、爾雅出版社、2000所収、16頁